

FAIL

FALCON

狙撃者



昭和五十三年八月三十一日 初版発行
昭和五十四年五月 一日 五版発行

著者／谷 克二

発行者／角川春樹

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目十三番一三
電話 東京 (〇三) 五七三二八六代表
振替 東京 一七五〇八〇 郵便番号 〇三

印刷所／信教印刷株式会社

製本所／大口製本株式会社

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

©Katsuzi Tani, 1978

Printed in Japan

0093-872227-0946(0)

狙擊者
目次

プロローグ

第一部 ファルカンの朝

第一章 リーズの墓標

第二章 鮮血と熱砂

第三章 脱走と追跡

第四章 パリの襲撃

セ ニ 三 四 五 六

第Ⅱ部 スペインの光と影

第一章 ラス・ヴェンタス闘牛場の闇

第二章 カステリアの月

第三章 ブラサ・オリエンテ宮殿前広場、正午

エピローグ

後記

参考文献

一五

一五

一七

三六

二五

二六

二六

装丁
日暮修一
資料提供
エール・フランス

狙擊者

—
マ
リ
ア
・
イ
ザ
ベ
ラ
に

プロローグ

その日、一九七四年十二月二十日、午前九時。

マドリッドの真冬の空は、冷たく澄んだ水色をしていた。寒風が悲鳴をあげて石造りの建物の間を吹きぬけ、広場や歩道に敷き詰められた玉石は氷結して、弱々しく朝の光を反映していた。それは、真夏のスペインの大地を灼くような光の奔流だけを知るものにとっては、想像もつかないほどのさびしい風景であった。

レチロ公園に近い、サラマンカ区にある教会の前に、黒塗りのドッジがとまった。前後をオートバイにまたがり、胸に短機関銃を吊った武装警官が固めていた。

ドアが開くと、背が低く肩幅の広い男が石畳に降り立った。ソフト帽をかぶり、びったりと身についたダブルのオーバーコートを着ている。広い顔には、猛禽類のような鋭い眼と、先端のはねあがった太い眉毛がついていた。顎が四角く張り、口もとは強固な意志の持ち主であることを示すように、一文字に引きしめられていた。スペイン首相、カレロ・ブランコ。フランコ総統の後継者である。

ブランコ首相は、教会の階段でわずかの間足を止め、レチロ公園の方角に眼をむいた。葉のおちてしまった樹木が、寒々とした灰色の幹をつらねているのが見えた。

ブランコ首相は身体をふるわせると、階段をゆっくりと上がって朝の礼拝にむかった。

四十分後、ブランコ首相が礼拝を終えて姿をあらわした。警備の警官がドアをひらき、ブランコ首相は、黒塗りのドッジに入った。武装警官は所定の位置にもどり、オートバイにまたがった。エンジン

ンが重い排気音をたてて始動し、イグゾースト・パイプからガスが吐き出された。ドッジを囲む車の隊列は、ゆるやかに走りだした。そのとき、すさまじい爆発音がおきた。火柱が立ち、ドッジはまるでマッチ箱のように五階の高さまで吹きあげられた。建物の屋根をとびこしたドッジは、きりをもむように教会の庭に落下した。

道路には、深さ五メートルに達する穴があいていた。ブランコ首相は救急車で病院に運ばれたが、車中で息をひきとった。

事件は、ただちにスペインのすべての警察機構に通告された。国境が閉鎖され、ブラック・リストに名前を記載されている人物は、片っぱしから逮捕状なしで拘引された。だが容疑者は捜査線上に浮かびあがってこなかった。

現場検証の結果、警察は以下の事実を発表した。犯行は、反政府運動グループの一つが仕組んだ計画であること。グループは、教会前の建物の地下室を借り、そこから教会の階段前までトンネルを掘り進んだこと。爆殺には対戦車用地雷三個が使用されたこと。

一方、フランスのボルドー市で、バス解放戦線がブランコ首相暗殺の成功を発表した。フランス国营放送のテレビ・インタビュアーに応じて、計画遂行者たちは黒いマスクをつけて、ブラウン管にあられた。

フランス国境に横たわるピレネー山脈をこえて逃げたのか、というインタビュアーの質問に、彼らは予想外の逃走ルートを明らかにした。それは、スペインと同じく警察国家の体制を布くポルトガルにいったん逃げこみ、漁船でビスケー湾を北上してフランスに入った、というものであった。スペイン警察は完全に逆をつかれた。警察の神経はすべて、地中海及びビスケー湾沿岸の海上ルートの基点、それに、ピレネーを縦横に走る問道のチェックに向けられていたからである。

このテレビ発表後も、スペイン警察による関係者逮捕は続いた。しかし、それはもはや、なんの説得力ももたなかった。スペインは世界に向けて、市民戦争以来消滅することのない地下運動組織が、依然として活発な活動を持続していることを露呈した。

ブランコ首相の葬儀は、十二月二十一日午後四時にとりおこなわれた。激しく雨が降り、葬儀参列者は異常なほど底冷えのする天候に悩まされた。総統フランシスコ・フランコは風邪のため葬儀には参列しなかった。しかし、フランコに指名された王位継承者ファン・カルロス王子の長身は、参列者の中にみられた。ブランコの政策批判者であつたファン・カルロス王子は、この事件に関しては終始沈黙を守っていた。

第Ⅰ部
ファルカンの朝

第一章 リーズの墓標

1

リーズ市は、中部イングランド地方のほぼ中央部にあたる都市である。東に隣接するマンチェスター市とは、大きな段丘でさえぎられている。

その日、スペイン首相ブランコが暗殺された数日後、リーズの街は冬の夕暮れを迎えて霧に包まれ始めていた。町を囲む段丘は、その稜線のうねりを霧の中でおぼろげににじませていた。

街筋に並んでいるナトリウム・ランプが、橙色の光線を薄闇に散らし、石畳の歩道は寒々と濡れて光っていた。

人々は分厚い毛のコートやオーバーの襟をたてて、背を丸めて歩いていた。

一人の男が、そんな人たちの間を縫うように速い足取りで歩いていた。道行く英国人たちと比べても拳一つぬきでるほどの長身で、皮のハーフコートに身を包んだ姿は瘦せぎすに見える。しかし、注意深い観察者なら、その軽い身のこなしから、彼がよく訓練された筋肉の持ち主であることを推測したであらう。

黒い髪がおだやかにカールしていた。同じ色の眉の下には、ひかえ目にしか感情をあらわさない二

つの眼があった。鼻すじがまっすぐに通り、唇は薄く引きしまっている。彫りの深い顔付きからは、その男が東洋人であると想像することは、むしろ困難であった。東洋の血を思わせるものと言え、それは高い頬骨だけであった。それとても、特に目立つというほどではなく、イタリアやトルコ系の人間にもある骨相であった。

リーズの町で、男は劉晶林という中国名を名のっていた。

霧が歩道の石畳から這うようにたち昇り、ナトリウム・ランプの隊列は遠ざかるに従って、水にじんだ絵具のようにあいまいにぼやけていた。底びえのするようなタイヤの音をたてて疾走する自動車も、こころなしかスピードを落し始めているようだった。

——このぶんでは霧は深くなる。アントニオにも注意をするように言わなければならないだろう。

男は、彼の雇い主である年老いたスペイン人のことを思った。スペインから亡命して来たのは三十年前、二十九歳のときだという。

ヘスペインでは炭鉱労働者だったんだよ。ある日アントニオ老人は、自分の身の上について語ったことがある。へ共和国時代に北部の炭鉱でストライキをやった。フランコがまだ少将だった頃だ。やつが指揮する軍隊がやってきて発砲した。一千人以上の死者がでてね。そのあとは、内乱だ。いろんなところで戦ったさ。トレド、グアルダハラ、バルセロナ、エプロ。でも、私は運がよかった。スペイン・フランスの国境がフランコ軍によって閉鎖される前にフランスに逃げこんだからね。

反フランコの組織を通じて、フランスから英国に渡った。

アントニオは、リーズの町で小さな花屋をはじめた。やがて、店の経営が軌道にのり、アントニオが周囲の環境になじんだころ、花市場の世話人は一人の英国女性を紹介した。小柄でひかえめなその女性と、アントニオは一年後に結婚し、一人娘のマリアが生まれた。マリアが十五歳になった年の冬、

マリアの母親は心臓衰弱で亡くなった。もともと、身体の弱い女性だったらしい。四年前のことであつた。

アントニオと劉と名のる若い男が出会つたのは、ちょうどその頃だつた。場所はロンドンのホルボーン地区にある移民局事務所で、霧雨の降る冬の日だつた。男は外国人登録に、アントニオ老人は滞在ビザの延期申請にやつてきていた。

移民局は陰気な建物だつた。殺風景な待合室は、アフリカやアジア、インドから流入してきたあらゆる人種でごつたがえし、人いきれとすえたような体臭、かん高い話し声が天井の低い空間に渦を巻いて充満していた。湿っぽく蒸れた空気で、アントニオは気分を悪くした。冷たい脂汗が流れ出し、吐き気を催した。立ちあがつて外にでようとしたが脚に力が入らず、無理に立ちあがつた途端、眼前が暗くなつた。

意識を回復したとき、アントニオは待合室のベンチに横たわつていた。若い男が静かな視線をアントニオにあててゐるのに気づいた。

ネクタイがゆるめてあつた。アントニオは反射的に上衣の内ポケットに手をやった。外国人の入りまじるロンドンでは、気を失つた人間から介抱するふりをして財布をぬくぐらいやりかねない連中も多い。

「財布は大丈夫ですよ」若い男は笑いかけた。切れ長の眼尻の皺が更に深まって、惹き込むような魅力があつた。

アントニオは好意をもつた。

「気分はどうですか」と男は滑らかな英語で訊ねた。

アントニオは彼をバブに誘い、薄いコーヒーを飲みながら言つた。